



15

四国遍路を 中心にした 巡礼研究への誘い

愛媛大学法文学部人文学科

内田 九州男 教授

日本や世界の巡礼を 歴史学、文学 国際比較など 多様なアプローチ から研究

このコーナーでは、私たちの社会や生活に身近な研究テーマをわかりやすく紹介する。第一線で活躍されている研究者の研究内容を中心に、学問の仕組みや今後の可能性などについて、インタビューする。

聖地を目指す巡礼は世界各地に見られます。日本にも四国の八十八カ所を巡る遍路をはじめとして、全国各地にさまざまな巡礼が存在します。巡礼や遍路は、これまで主に宗教学や民俗学の分野で研究されてきましたが、それらの分野に加えて、歴史学からのアプローチ、文学と巡礼、さらには巡礼の国際比較など、一層幅広い分野にまたがって研究してみると、新たな発見があり、また新しい課題も見えてきました。

地域貢献を主眼に研究をスタート 伝承だけに頼らない実証研究が中心

学問の動向や研究テーマの設定は、時代の変化や社会の要請など、外的な要因にも大きく左右されます。10年ほど前、大学の地域貢献が話題になった折、愛媛大学でもさまざまな貢献策の検討が始まっていました。法文学部の歴史学と文学を専攻する教員の間で、四国遍路を共同の研究テーマにできないかという議論を行いました。ただ、四国遍路だけを対象にすると、外国史や外国文学の研究者の参加が難しくなります。そこで、四国遍路と日本の巡礼を研究すると同時に世界各地の巡礼も研究し、四国遍路との比較を行うことで、四国遍路の特徴を明らかにしようということになりました。そして2000年に「四国遍路と世界の巡礼研究会」を立ち上げて研究活動を開始し、2002年度には科学研究費補助金に採択され、本格的な研究活動を進めることができました。

当初、研究会には遍路や巡礼の研究者がいなかったこ

ともあって、遍路研究においては、1996年に出版された『講座 日本の巡礼』（全3巻、雄山閣）を、研究の手がかりとしました。この書物は主に民俗学の立場から日本の巡礼研究を総括したものであり、この中の四国遍路に関する研究課題の検討から研究を始めたのです。

もっとも研究の方向性は明確でした。四国遍路については、伝承が真実のように語られている部分が多く、その根拠を突き詰めていくとあやふやになってしまうことが少なくありません。そこで、研究会では、徹底的に史料（資料含む）に基づいた実証研究を目指しました。1つひとつの史料を丁寧に分析し、その結果を従来の研究成果と比較していく。地道ですが最も基本的な研究方法です。そしてその研究成果は必ず公表していくことにしたのです。**【写真】**それを毎年積みあげてきたことが、この研究プロジェクトの一番の強みだと思っています。史料の発掘についても、歴史学や文学など民俗学とは別の目で探し始めると、意外と身近なところから発見できたりします。例えば、遍路は近世の歌舞伎に登場しており、近世文学の研究者は、それを調査し考察を加えました。このように多彩な研究者が参加したことが、巡礼や遍路をこれまでとは異なる視点から捉えることにもつながりました。

「来世における魂の救済」と「現世利益の実現」が 巡礼の大きな目的

巡礼は、キリスト教はもちろん、イスラム教やヒンズー教、仏教など世界各地で行われており、人類に普遍的な行為だといわれています。それだけに、巡礼や遍路について一言で説明するのは至難の業といえます。とはいえ、四国遍路は世界遺産登録を目指していますから、その独自性や重要性を明確にすることは非常に大切です。

これまでの研究から、巡礼には大きく2つの目的があ

ることがわかっています。1つは「来世における魂の救済」です。死後極楽浄土に行く(=救済される)ために、生きている間に巡礼を行うわけです。もう1つは、「現世利益の実現」です。病気を治す、苦痛をやわらげる、悩みを解消するなど、現在直面している問題の解決のためです。これら2つの目的を併せ持つかたちは、スペインのサンティアゴ巡礼、日本の西国巡礼、四国遍路など、多くの巡礼に共通しています。

また四国遍路には、「島四国」がいくつかあることが知られています。例えば大島(愛媛県今治市)や小豆島(香川県小豆郡)などに八十八カ所が設けられ、これらを本四国の札所と見立てて巡礼を行うわけです。このように本来の巡礼地ではない場所に設けられた巡礼地とそこで行われる巡礼を、一般に「写し巡礼(または移し巡礼)」といいますが、イタリアのサクロモンテ巡礼など、キリスト教世界にもあります。こうした写し巡礼が行われることが、四国遍路と世界の巡礼との共通点でもあるわけです。

興味深いのは、キリスト教世界の巡礼です。フランスのルルド巡礼やポルトガルのファティマ巡礼は、現世利益を求める傾向が強い巡礼ですが、その信仰の中心はともにマリア信仰です。キリストは、魂の救済とそのため生き方を説いたわけですから、現世利益の実現が信仰の前面に出てくると、教義そのものが揺らぎかねません。そこで、魂の救済と現世利益の実現という2つの願いを、キリスト信仰とマリア信仰で分担させ、現世利益の実現を求める人々のためにマリア信仰を用意したのではないかと、私は推測しています。

四国遍路も、現在では現世利益の追求という傾向が強くなって出ています。札所では、「願いのろうそく」が売られていますし、実際、家族が重病を抱えていたり、深刻な悩みを抱えている人がお遍路さんになっている例があります。しかも、大病が治った等の「奇跡」が、事実として存在しています。例えば、1960~1964(昭和35~39)年の間首相を務めた池田勇人氏(故人)は、1934(昭和9)年「島四国」(伊予の大島)の遍路を歩き通すことで、自身の難病(昭和5年発症)回復の機縁を得たという逸話を残しています(『先達教典』)。

遍路の2つの目的のうち、「来世での魂の救済」(来世での安穩)については、残念ながら確かめる手段がありません。しかし現世利益の実現に関しては、実際に現世で救済された人が過去にいたわけですから、今後の遍路研究では、伝承の部分と厳密に区別しながら、こうした「奇跡」

【写真】これまでの研究会の研究成果をまとめた報告書など



についても実際にどういうことが起こったのかを、実証的に研究していかなければならないと考えています。

「巡礼の非宗教化」は世界的な傾向
四国遍路ではアウトドアスポーツ感覚も

巡礼や遍路には必ず宗教的な意味があります。何より、来世での魂の救済と現世利益の実現という2つの目的自体が極めて宗教的です。ところが近年、巡礼が宗教的な色彩を失いつつある傾向が、世界的に顕著になっています。

ここで浮かび上がってくるのが「自分探し」というキーワードです。サンティアゴ巡礼は若者に人気が高く、四国遍路も若者の参加者が増加しています。四国遍路では定年を迎えた人の割合も高いのですが、これらはいずれも自分探しが目的だといわれています。聖地を訪れる旅、札所を巡る旅を通して、自分自身を見つめ直したり、これまでの人生を振り返ったり、次の生き方を模索したりするわけです。こうした自分探しは、従来宗教が担っていた「救い」の機能を持っていると考えられています。宗教的な力にすぎず、自分探しを実現するというよりは、旅に出、旅を続けること自体が自分探しのプロセスだと捉えているわけです。

さらにもう1つの新しい考え方が出てきています。それは、自然に触れ、人々と交流しながら歩く行為自体を巡礼や遍路の目的とする考え方で、アウトドア活動としてのトレッキングやウォーキングに近

PROFILE



内田九州男(うちだ・くすお)
愛媛大学法文学部人文学科教授

1968年、京都大学文学部史学科を卒業。翌年大阪城天守閣学芸員として就職。1992年より現職。日本近世史の中で部落史や都市史などを探究。近年は「四国遍路と世界の巡礼研究会」の代表として遍路史研究に邁進。四国4県の「四国遍路世界遺産登録推進4県協議会」の専門部会長でもある。『伊予の近世史を考える』(2002年、創風社出版)、『四国遍路と世界の巡礼』(2007年、法蔵館、共著)など著書多数。



いものといえます。特に四国遍路は、道や宿がきちんと整備されている上に、遍路同士の交流はもちろん、「お接待」^(注)という独特の慣習によって地域の人たちとの交流もできますから、そうした目的にはぴったりなのです。

このように、巡礼や遍路を自分探しや一種のスポーツ活動として捉えるような風潮が盛んになってきましたが、一方で単に自然に触れ合える場所に行けばよいというわけではなく、やはり巡礼地が持っている神秘的な雰囲気、つまりスピリチュアリティに惹かれる傾向は依然として強く残っています。ですから、従来の宗教性が希薄になる中で、若者を中心に巡礼が再び注目され始めている点については、その理由も含めて今後さらに追究していく必要があると思います。

ちなみに、四国遍路では、自分の足で歩いて札所を巡る歩き遍路の方が、バスやタクシーなどを使った遍路よりも、より本格的だと考えられています。しかし、実際の参加者を観察すると、歩き遍路の人たちはスタンプラリーのように札所を回っていくような傾向が強く、バスツアー人たちが、本尊の前でお経をあげ、さらに大師堂の前でお経をあげ…といった本来の作法通りに巡礼を行っている傾向が強いという評価もあります。そうなると、バスツアーの遍路の方が、宗教性が高いともいえるわけで、こうした現象からも、巡礼という行為と宗教性の関係は、簡単には語れないことが伺えます。

世界では珍しい回遊型の四国遍路 白装束はあの世と現世を行き来できる証？

世界の巡礼と四国遍路を比較すると、四国遍路の興味深い特色がいくつか見えてきます。

例えば、世界の巡礼のほとんどは、聖地に行って帰ってくることで巡礼が成立する「往復型」の巡礼です。メッカ巡礼にしても、サンティアゴ巡礼にしても、目的地はただ1つです。ところが、四国遍路の場合は八十八カ所をすべて巡ってはじめて満願になります。いわば「回遊型」の巡礼といえます。しかもどの札所もすべて平等で、任務分担もありません。日本では、3カ所から108カ所まで複数の目的地を組み合わせる巡礼が定着しています。これは、日本文化の独自性と見ることもできるわけで、今後の研究では、なぜ日本の巡礼が回遊型になったのかを解明していくことが必要だと感じています。

四国遍路では衣装も興味深い研究対象です。現在、お遍路さんは白装束が一般的ですが、これの定着は1958

(昭和33)年頃と比較的新しいのです。史料によれば、江戸時代や明治時代には決まった服装はありませんでした。1940(昭和15)年頃に白装束が「本四国」遍路の服装として定着しかかったようですが、その後は続かなかったようです。袖のない「笈摺」^{おいずる}という衣装を着る西国巡礼とは対照的です。

なぜ、遍路の服装が白装束になったのか、現在調査している段階ですが、私は遍路バスを最初に走らせた伊予鉄道が主催したバスツアーが定着して行く中で、白装束がユニホーム化していったと推測しています。いわば四国遍路をアピールするイメージ戦略です。

白装束は死んだ人を意味します。八十八カ所の札所で組織する「四国八十八ヶ所霊場会」のあるご住職は、白装束での旅を明確に「死出の旅」としています。キリスト教世界の巡礼では死者を意味することはありません。キリスト教では死者が現世に還ることもありません。そのため、「お遍路の服装が死を意味するとすれば、そこには、生者と死者が相互の世界を往還できるという考えが根底にあるからだろう」と指摘する研究者もいます。このように、遍路と中世キリスト教の巡礼は、共通点を持ちながらも相違点も大きく、巡礼の比較史研究には、一層の深化が期待されています。

学生の教育上の効果も大きく 教育・研究・地域貢献にもつながる

研究会の活動は、学生の教育にも大きな影響を与えています。現在、四国にある多くの大学では、学生に遍路を体験させる教育プログラムを備えています。最初に導入したのは、愛媛県にある今治明德短期大学ですが、地域文化を理解するという体験学習が、学生の教育に一定の効果を与えることが理解され、徐々に広まってきたようです。本学も、比較的早い段階から遍路道を歩くプログラムを導入しており、学生たちにも人気です。最初に講義で四国遍路の概要や最新の研究成果などを解説した上で、最低2日間は遍路道を歩きます。「友人ができる」「達成感を味わうことができる」など満足度の高い授業のようです。なお、この授業の担当は研究会のメンバーです。

また、研究成果は学術的な解明にとどまらず、遍路道の整備に対する提言に活用できるなど、実際の地域振興にもつながっていきます。このように、「四国遍路と世界の巡礼」は、教育・研究・地域貢献という、大学の3つの使命をすべて果たしうる研究テーマでもあるのです。

(注) お接待…地元の人たちや支援者がお遍路さんに対して、物、お金、労力などを無償で提供する行為。宿の提供は「善根宿」と言って接待とは区別される場合が多い。